

平成二十八年八月十日発行  
皇學館論叢第四十九卷第四号  
抜刷

研究ノート

小林秀雄「私小説論」に関する一考察

—— 転向文学論として読んだ場合 ——

木  
村  
優  
芽

## 小林秀雄「私小説論」に関する一考察

—— 転向文学論として読んだ場合 ——

木村優芽

### □ 要 旨

小林秀雄の「私小説論」について吉田熙生や平野謙、横光利一などを巻き込みながら考察する。なお、その際、「社会化した『私』」を考察の中心に据える。

「社会化した『私』」は戦後、平野謙ら「近代文学」の同人たちによって語り継がれてきた経緯がある。しかし、彼らの「社会化した『私』」についての言説は政治的な意図を含んだものであった。そこで、小論では「私小説論」が発表された昭和十年の時点に立ち返り、考察を行う。また、「社会化した『私』」の具体例として挙げられているジ

イドについても、横光利一の「純粹小説論」との比較を試みながら、考えていく。そして最終的には、「社会化した『私』」やジイドの「純粹小説」の問題が「私小説論」の末尾部分へと収斂していくことを明らかにする。

### □ キーワード

小林秀雄 私小説論 プロレタリア文学 平野謙  
純粹小説論 横光利

はじめに

小林秀雄「私小説論」の研究史を紐解いてみると、吉田熙生の次のような主張にぶつかると。

「私小説」という近代日本独特のリアリズムについての論であり、プロレタリア文学の崩壊という状況の中での転向文学論であり、横光利一「純粹小説論」に対する批判であり、さらにはジイド論でさえある。<sup>(注)</sup>

右の引用から明らかであるように吉田は、「私小説論」の解釈についてその多様性を示唆している。

戦後、「私小説論」については平野謙によって「社会化した『私』」だけが恣意的に取り上げられて論じられてきた経緯がある。小論は戦後のチームではなく、小林が「私小説論」を實際に書いた戦前のチームに戻り、「社会化した『私』」の本来の意味を取り戻すことを企図したものである。

## 一章、平野謙と「社会化した『私』」

「私小説論」には「政治と文学」、それに加えて「社会化した『私』」という二つの柱がある。両者は日本の文学史上で離れる

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）

ことなく密接に絡み合っている。

まずは、「社会化した『私』」が「私小説論」の中で、どのように登場するか見ておくことにする。

フランスでも自然主義小説が爛熟期に達した時に、私小説があらわれた。パレスがそうであり、つづくジイドもブルウストもそうである。彼等が遂にいかなる頂に達したとしても、その創作の動因には、同じ憧憬、つまり十九世紀自然主義思想の重圧の為に、解体した人間性を再建しようとする焦燥があった。彼らがこの仕事の為に「私」を研究して誤らなかつたのは、彼らの「私」がその時すでに十分に社会化した「私」であったからである。

右が「私小説論」で「社会化した『私』」について言及している部分である。

「社会化した『私』」とは孤立していた自我が社会とのつながり得た状態をさす。

「私小説論」で小林は「社会化した『私』」をフランスで起きた現象としている。

平野謙は昭和八年の「文学界」の結成と「私小説論」の発表と同年である昭和一〇年に成立したフランス人民戦線の誕生と重ねて文学の領域における「人民戦線の結成」<sup>(注)</sup>を小林が企図したとして、政治的な意味合いを「私小説論」に見出そうとし

た。そこで目を付けたのが「社会化した『私』」である。「社会化した『私』」という表現について、平野の意図としては二つ考えられる。

一つは、「私小説論」中の「社会化した『私』」という表現だけを取り出して、先に記したように、政治的意味合いを持たせること。

もう一つは、「社会化した『私』」という表現を用いて自身の戦時中の言動に整合性を持たせることであつた。しかし、これについては「文学的希望」<sup>(注四)</sup>にすぎないとして同じ『近代文学』の同人である佐々木基一が批判した。

平野は若輩のころ、マルクシズムに近づいたが、最後は革命運動からは脱落、戦時中は情報局に勤め、戦争に協力するという経歴を持っている。こうした平野の経歴をかんがみると、「社会化した『私』」に政治的な意味合いを持たせようとしたことは、彼にとつて戦時中における自身の行動についての言い訳であつたと推測される。

「社会化した『私』」という表現については後年、小林自身も『「社会化」なんて言葉が悪かつた』<sup>(注四)</sup>と反省している。これは、小林の意図を超えて「社会化した『私』」という語が用いられたことを、小林自身が暗に認めたことを意味する。早い話が小林は利用されたのである。

平野は「私小説論」から「社会化した『私』」という言葉だけを取り出し、そのみを一人歩きさせた。このことによつて、「私小説論」に関する議論を歪めてきたのである。

「私小説論」を考察するときに、「社会化した『私』」という表現のみを取り上げて論じることが避けるべきである。

## 二章、昭和一〇年における「私」の「社会化」

ここからは、戦前において作家の「私」が「社会化」した過程を明らかにしていく。それに加えて、外国から渡来した「思想」の「社会化」という問題についても合わせて考察する。

最近の転向問題によつて、作家がどういふものを齎すか、それはまだ言うべきことではないだろう。ただ確実なことは、彼らが自分達の資質が文学的実現にあつて、嘗て信奉した非常な思想にどういふ具合に堪えるかを究明する時が来た事だ。彼らに新しい自我の問題が起つて来たことだ。そういう時彼らは自分のなかにまだ征服しきれない「私」がある事を疑わないであろうか。

右は小林が転向について言及した部分の引用である。ここで注目すべきは「新しい自我の問題」や「まだ征服しきれない『私』」という表現が出てきていることである。これらは日本で

作家の「私」が「社会化」したことと関係がある。

こうして唐突に転向については小林は記しているわけであるが、実際の順序としてはプロレタリア文学の渡来があり、その後、転向の問題が起きるわけである。以下では小林の記述をたどりつつ、時系列を整理しプロレタリア文学渡来以前から順を追って説明していく。

プロレタリア文学以前にも日本には様々なイデオロギーが渡来したが、小林の表現を借りれば、すでに「完成された審美感」を持ち合わせていた日本の作家は「新しい思想を技法のうちに解消する」のみであって、「文学自体に外から生き物のように働きかける思想の力」を体感することがなかった。

これは日本の作家が西洋より渡来した「思想」について小説を書くうえで技術として個人で「解消」するのみで、その「思想」の背景を理解しようとし、それを一般化、つまり「社会化」しようとはしなかったことを意味する。

近代以後、私小説という日本固有のジャンルが発達した。これについて「私小説論」では次のような記述がある。

私の封建的残滓と社会の封建的残滓との微妙な一致の上に私小説は爛熟していった。

右の引用からも明らかであるように小林は、作家とその「私」を取り巻く社会が共通して所有していた「封建的残滓」を私小

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）

説の発展の要因に挙げている。

小林は、日本の作家について「思想」を「遊戯」的に、すなわち「技法的に解消」していることを指摘している。彼等は、「思想」の背景を理解することなく、小説を書く技術としての「み受容した」のである。つまりこれは、彼等が「思想」を本質的ではなく、表層的に理解していたことを意味する。そのことについて小林は次のようにいっている。

わが國の作家達は、西洋作家等の技法に現はれている限りの思想を成る程悉く受け入れたには違ひなかつたが、これらの思想は、作家めいめいの夢を育てたに過ぎなかつた。めいめいの夢から脱して社会化しようにも、その地盤がなかつた。外来思想が作家達に技法的にのみ受け入れられ、技法的にのみ生きざるを得なかつた（…以下略）

右の引用では日本において「思想」が共通して「社会化」する「地盤がなかつた」として、「技法的にのみ受け入れられ、技法的にのみ生きざるを得なかつた」ことを小林は記している。

また、小林は日本の作家が、「思想」を「めいめいの夢」として「育てたに過ぎなかつた」とも記している。これは日本の作家が本来、普遍的であるはずの「思想」を己の好みに曲解したことを意味する。つまり、本来の姿から言えば、彼らの作品に表象される「思想」はいわば畸形なのである。

以上のことから日本の作家が「思想」を受容する際に、普遍性が欠如していた点が浮かび上がってくる。しかしながら、反対に普遍性を失ったために、彼等の作品は各々「個人の明瞭な顔立ち」を示しているのであり、これは後に記す「私」が偏狭であることと通じるのである。

右がプロレタリア文学の渡来以前の事である。ところが、プロレタリア文学の輸入後、事態が一変する。

プロレタリア文学が持つ「思想の力」はそれまでに渡来した思想のように「技法的に解消」することができないシロモノであった。

劇業とも言うべきプロレタリア文学は結果として、己が持つ強力な「思想の力による純化」のために私小説の書き手たちの「顔立ち」を「抹殺」してしまったと小林はいう。つまり、プロレタリア文学は私小説の強みであった個性を「思想の力」で消し去ったのである。

「思想の力による純化」という表現について、この「純化」というワードを小林は「社会化」と等しい意味で用いている。ちなみに、この「純化」や「社会化」は画一化や普遍化に通じる。そしてそれは多分にマイナスのニュアンスを含んでいる。

いけるとこれは日本風な「社会化」の仕方であった。フランスには「思想」を共通して「社会化」する〈土壌〉があっ

た。しかし、日本にはそのような〈土壌〉がなかった。そのため先に明らかにしたようにプロレタリア文学の力を借りて「私」を普遍化することとなったのである。ただし、注意すべきは、右で言う「社会化」や「純化」は戦時中無力であったことに負い目を感じている平野謙が、戦後になってから我田引水したものと異質なものだということである。

### 三章、転向文学の可能性

思想が各作家の独特の解釈を許さぬ絶対的な相を帯びていた時、そして実はこれこそ社会化した思想の本来の姿なのだ（：以下略）

右の引用は「思想」の「社会化」についての説明である。「社会化した思想の本来の姿」は「思想」それ自身が「絶対的な相を帯びてい」と説明されている。それも、「各作家の独特の解釈を許さ」ないほどの強烈さを備えた「絶対的な相」である。この説明はプロレタリア文学に当てはまる。

「絶対的な相を帯びていた」ために「各作家の独特の解釈を許さ」なかったことからプロレタリア文学は、「私小説論」においてはそれ自身が「社会化した思想」として扱われている。

このようにプロレタリア文学はそれまでに渡来した「外来思

想」とは異質なものであった。日本の作家はプロレタリア文学渡来以前の「外来思想」については「技法的」に「解消」するのみであった。

しかし、プロレタリア文学は「無用な技巧の遊戯」をするところが「不可能」であった。それは「解消」することのできないほどに「絶対的な」イデオロギーだったのである。つまりこれは、プロレタリア文学がそれまでのように「技法的に受け入れる」ことのできる範疇を超えていたことを意味する。

この強力なイデオロギーを前にして「作家の技法」は「貧しく」なっていかにざるを得なかった。そして、その「技法の貧しさのうちに私小説の伝統は決定的に死んだ」のである。

結果としてプロレタリア文学は「外来思想」を「技法的」に「解消」していた私小説を滅ぼすこととなった。小林の表現を借りるならば、プロレタリア文学は「我が国」の私小説を「征服」したのである。

こうして私小説を滅ぼし、文壇を席卷したプロレタリア文学はわが世の春を謳歌する。しかしながら、その栄華は長くは続かなかった。プロレタリア文学は私小説を「抹殺」した後、退潮の一途をたどり、転向文学へと変貌を遂げる。

プロレタリア文学の退潮について、その原因は外的要因に収斂される。端的に表現するならば、国家がマルキストに対して

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）

弾圧を開始したのである。共産主義者は逮捕されて、投獄された。当然プロレタリア文学の書き手たちにも逮捕者が出た。彼らの中に転向し、マルクシズムを捨てたものがある。これが転向文学の起りである。

以上の説明からもわかるように、プロレタリア文学の側から自発的に姿を変えたわけではない。プロレタリア文学は、国家によって外からその姿を変えさせられたのである。これは国家権力が文学を変質させたことを意味する。こうして外部からの弾圧によって転向文学は誕生した。

以上のことについて「政治と文学」の観点からいえば、政治(注五)が文学の領域に侵入していき、一種の文芸思潮を壊滅へと追い込んだのであり、転向という結果はそれによって政治の優位性が示されたことを意味する。

転向した後に執筆された小説はある種異様なもので、それまでの小説とは一風変わっている。かつてのプロレタリア文学の書き手たちはもはや転向しているため、プロレタリア文学の理論を創作で表現することができない。行き場をなくした彼等は先天的に身につけている「完成された審美感」を頼りに、「伝統的な」私小説へと回帰し、獄中での体験や出所してからの暮らしを小説に書くのである。

転向者の「私」は、先に記したようにプロレタリア文学が発

揮した「思想の力」によってすでに「純化」され画一化されたはずであるが、作品の題材は私小説の流れをくみ、身の回りのものが占めている。つまり、個人的な題材を用いながらも社会性を帯びているという、それまでの私小説とは趣が異なる新たな小説のジャンルが生まれた。それが転向文学である。

こうして「抹殺」されたかに見えた私小説は転向文学として姿をかえながら再生された。ここで問題となるのは転向文学がプロレタリア文学の単なるなれの果てではないということである。プロレタリア文学は私小説を「抹殺」したかに見えたがそれは違う。むしろ、プロレタリア文学は私小説を「征服」し、自身の懐に私小説を内在させることに成功したのである。そして、「征服」された私小説は、プロレタリア文学が外的要因によりその存続の危機を迎えたとき、内側からプロレタリア文学へ影響を及ぼし、作用することでプロレタリア文学から転向文学への移行を行わせたのである。

転向文学とは、「私」が「純化」したことによって備わった社会性と従来の私小説が持っていた個人性の間に生まれた子であるといえる。この社会性と個人性が交錯する点で転向文学は当時における新しい文学としての可能性を秘めていることを小林は示唆している。

したがって、転向文学の出生は歪なものであるが、それが歪

であるが故に、このような文学は、日本風に「私」が「社会化」した結果であると結論付けることが出来る。

そして転向文学の書き手たちの「私」は、先に引用した箇所にある「まだ征服しきれない私」であり、「新しい自我の問題」と一致するのである。

「新しい自我」や「まだ征服しきれない私」とは「思想の力」のおかげで「純化」されて普遍化、あるいは一般化した「私」のことである。この「新しい自我」や「まだ征服しきれない私」のことを小林は「社会化した『私』」と表現した。

先の考察で明らかであるが、小林は「社会化した『私』」という表現をマルクシズムの力によって「純化」し、画一化した「私」という意味で用いたわけである。

#### 四章、視点の保持者としての「私」

##### — ジイドの提唱した「純粹小説の思想」

「私小説論」では、「私」がすでに「社会化」していた作家としてジイドがあげられている。

ジイドと横光利一は「純粹小説」で結びつく。ジイドは「社会に於ける個人」というものを持つ意味」や「自然に於ける人間の位置」を理解していた作家として「私小説論」に登場するの

である。ジイドに端を発した「純粹小説の思想」は日本に輸入され、太宰治や尾崎士郎などが影響を受けるわけであるが、横光利一もまたその一人である。横光は昭和十年に評論「純粹小説論」を『改造』の四月号に発表する形で、自身のジイド受容を昇華させた。

「純粹小説論」はセンサーショナルな評論として文壇内で受け止められたが、その内には当然批判的な反応も少なからず存在したのである。中村光夫や守山啓、川端康成の反応がそれである。こうした状況に対して小林は横光の「純粹小説論」のために、このままジイドの「純粹小説の思想」までが誤解されることを恐れた。そのため、連載していた「私小説論」の第三回でジイドと横光を取り上げたのである。

まずは、横光が「純粹小説論」で主張している事柄を明らかにしたい。

横光利一の「純粹小説論」は冒頭、次のように始まる。

もし文芸復興とすべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に文芸復興は絶対に有り得ない、と今も私は思っている。<sup>(注六)</sup>

昭和一〇年、それまで権勢を誇っていたプロレタリア文学戦線は崩壊し、彼らによって退却を余儀なくされた明治・大正期からの大家は文壇での地位を取り戻しつつあった。右に引用し

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）

た個所に出てくる「文芸復興」という表現はそういう時代背景を的確に表現している。

横光利一の「純粹小説論」が発表されたのは、昭和十年の四月である。これは「私小説論」の連載が開始する一月前のことであった。横光は先の引用部分に続けてこう記している。

今の文学の種類には、純文学と、藝術文学と、純粹小説と大衆小説と、通俗小説と、およそ五つの概念が巴となって乱れているが、最も高級な文学は、純文学でもなければ、藝術小説でもない。それは純粹小説である。

右では、当時の文壇で主だった小説の種類を羅列したうえで「純粹小説」の優位性を説いている。加えて横光はその性質について「通俗小説と純文学とを一つにしたもの」と述べている。さらに先の引用部分に続けて「純粹小説」の語りの問題については次のように提唱している。

近代個人の道徳と理知との探索を見捨てて、われら何をなすべきであるのか。けれども、ここに作家の楽しみが新しく生まれて来たのである。それはわれわれには、四人称の設定の自由が赦されていることだ。純粹小説はこの四人称を設定して、新しく人物を動かし進める可能の世界を実現していくことだ。

横光利一が「純粹小説論」で主張している事柄は以上である。

これに対して小林は、横光の「文章が心理的に書かれている」として、批判し、続けてジイドの「純粹小説の思想」の解説を施すことで、横光独自の「純粹小説論」によって生じたジイドの「純粹小説」の概念についての誤解を解こうと腐心している。小林によれば、ジイドの「純粹小説の思想」は「四人称」で語られる小説ではなく、リアリズム批判に重きを置いたものである。

自然派の小説家たちは人生の断片ということをいつたが、彼等の大きな欠点は、その断片をいつも同じ方向、つまり時間の方向に、ある長さに切ってしまうことだ。何故、縦にも横にも上にも下にも切つてはいけないのだ。

右の引用で小林が意図するところは、「自然派」の作家への批判なのである。彼らの作品は単一的な視点で描かれているために平面的に進んでいく。小林はこれを批判している。これは言いかえれば、小林が「『人生の断片』の切り方、銚の入れ方」を問題として捉えていることを意味している。ちなみに、この「銚の入れ方」に工夫を凝らし、時間を「縦横十文字に切つて」いる小説、それがジイドの「贗金つくり」<sup>(注七)</sup>である。

「贗金つくり」は切り口がいくつも存在するよう作られているため「読者は読みながら無数の切り口に出会う」ことになる。これにたいして「在来のリアリズム小説はこの無数の切り口に

「鈍感」だった」と小林は記し、既存のリアリズム文学への批判を展開している。

ジイドは自身の実験小説「贗金作り」で複数の語り手を配置し、様々な角度から「事件」について語らせている。これによってジイドは物語が一本調子に終わることを避け、多面的に物語を構成することに成功している。

結局のところ、小説における「銚の入れ方」とは語りの問題に他ならない。これは視点の保持者としての「私」が問題となると言いかえることもできる。どこから「事件」を眺めるかが問題となるのである。

人物をどのように配置してそれぞれに語らせるか、これが「純粹小説の思想」の要諦である。何も横光が提唱したように「四人称」の小説である必要はないのである。人称を増やすことによって純粹さが増すわけではない。

## 五章、新たなる私小説——末尾部分の考察

私小説は滅びたが、人々は「私」を征服したろうか。私小説は又新しい形で現われて来るだろう。フロオベルの「マダム・ボヴァリーは私だ」という有名な図式が滅びないかぎりには。

「私小説論」は右のような文章で結ばれている。この末尾部分がこれまで多くの評論家を悩ませてきた。一見とってつけたように見えるかもしれないが、むしろ「私小説論」の各章ごとに言及されている問題は全てこの末尾部分へと収斂されるのである。

「私小説は滅びたが、人々は『私』を征服したろうか。」と「私小説は又新しい形で現われて来るだろう。」という二つの表現については三章で明らかにした私小説の再生と関係がある。

まず、前者についてであるが、たとえ既存のジャンルとしての「私小説」の書き手がいなくなったとしても、作者が「私」を「征服」しようとするをやめない限り、小説は生み出されるだろう。

そして「征服」した「私」を十全に表現しつくした小説が現れた際、読者はそれを「私小説」と呼んでも差し支えない。その場合、作者の「私」はその作品の主人公に還元されている。

次に後者であるが、二章で述べたように日本の作家の「私」はプロレタリア文学の「思想の力」によって画一化された。だがそこで立ち止まることなく、「社会化した『私』を「新しい自我」の問題として捉えなおし、「まだ征服しきれない私」があるとして、さらにそれを「征服」したとき初めて私小説が転向文学として再生するのである。

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）

つまり、「私小説は又新しい形で現われて来るだろう。」と小林が記した「新しい形」の「私小説」とは転向文学として復活した「私小説」を指すのである。そして、当然のことながらそれは既存の私小説とは性質が異なる。「新しい形」の「私小説」である転向文学の書き手は、「私」がマルクシズムの力を借りてすでに「社会化」している。したがって、既存の私小説の書き手のような物事の平面的な把握とは異なり、立体的に対象を把握することが出来るようになってるのである。

一方「『マダム・ボヴァリイは私だ』という有名な図式」であるが、『ボヴァリー夫人』がゴシップとなった時に、フロオベルは「マダム・ボヴァリイは私だ」と答えたとされる。フロオベル『マダム・ボヴァリイ。つまり、作者⇨主人公。これは文学の一種の公式である。

先に記したように、小説が執筆されるとき、作者が十全に表現しつくした「私」はその作品の主人公に還元される。そして、読者は一般に小説を読むときに作品の語り手である主人公と作者を重ねる。このことによって主人公の背後に潜む作者の存在を掴もうとする。

作者⇨主人公として物語を把握しようとし、読者は物語に没入することで主人公に己を重ねる。これは言い換えると、読者が主人公の視点から物語の展開を追っていくことを表す。

以上の説明から明らかであるが、「マダム・ボヴァリイは私だ」という有名な図式」は単なる作者＝主人公という一般的な公式を表すだけでなく、一元的な主人公の視点からの語りを示唆するものであるといえる。

このことはこれまで見てきた「事件」の全貌を把握するため語り手を幾人も配置したジイドの「純粹小説の思想」とは一見相反するように捉えられがちである。しかし、この一見相反するように見える両者こそがむしろ転向文学の特徴を構成する重要な要素となるのである。

「マダム・ボヴァリイは私だ」という有名な図式」はリアリズム文学に代表される単一的な視点からの語りを示唆するものであってこれは私小説の名残を残す転向文学の一元的な語りとは一致する。

一方ジイドは、複数の語り手を作中に配置することによって多角的に語ろうとする。では、転向文学の場合どうか。転向文学においては語り手が一人でジイドの「純粹小説の思想」における複数の語り手の役割を果たすのである。

こうして「社会化した『私』」と向き合う転向文学は、一人の語り手による単一的な視点での多角的な語りを可能にするのである。この単一的な視点から多角的に語ることが転向文学の特徴である。

以上のことから「マダム・ボヴァリイは私だ」というフロベルの台詞とジイドの「純粹小説の思想」、両者は転向文学において邂逅するのである。

#### おわりに

これまで、吉田熙生の主張を足掛かりに、平野謙や横光利一、ジイドなどを巻き込みながら、考察を重ねて来た。冒頭に述べたように吉田は「私小説論」の解釈の多様性を示している。小論は、吉田が提示した複数の論点を検討することで、転向文学の語りの問題という新たな論点を見出した。これによって読みの可能性が少しでも広がれば幸いである。

#### 注

注一、吉田熙生「私小説論」『国文学 解釈と鑑賞』514  
小林秀雄の道程（昭和五〇年八月一日発行 至文堂）

注二、平野謙『昭和文学入門』（昭和三二年、河出新書）

注三、佐々木基一『昭和文学の諸問題』（昭和三二年、現代新書）

注四、座談「文学と人生」（昭和三八年八月『新潮』中村光夫、

福田恒存、小林秀雄）

注五、具体例としては昭和九年に解散した日本プロレタリア作

家同盟（ナルプ）のケースが挙げられる。ナルプは治安維持法の改悪によって合法団体ではなくなったため解散に追い込まれた。

注六、横光利一「純粹小説論」『現代日本文学論争史 下巻（平野謙・小田切秀雄・山本健吉共編・昭和三十一年、未來社）  
なお、横光利一「純粹小説論」の引用は全て右記のものに拠った。

注七、一九二五年（大正一四年）『新フランス評論』に発表した長編小説。

#### 付記

※小林秀雄「私小説論」の引用は『近代文学評論体系第7巻昭和期Ⅱ』（昭和四七年、角川書店）に拠った。なお、漢字仮名表記は現行のものに改めた。また、ルビは適時省略した。

（きむら ゆうが・

皇學館大学大学院文学研究科博士前期課程国文学専攻）

小林秀雄「私小説論」に関する一考察（木村）